九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

# 看護倫理教育に向けた臨地実習の位置づけに関する研究 ： 臨地実習における学生の人間欲求構造の分析

丸山, マサ美
九州大学医学部保健学科看護学専攻

https://doi.org/10.15017/43

出版情報：九州大学医学部保健学科紀要. 2, pp.1-6, 2003-09. 九州大学医学部保健学科
バージョン：
権利関係：

九州大学医学部保健学科紀要，2003，第２号，1－6
Memoirs Kyushu U. Sch. Health Sci., 2003, vol.2, 1－6



# 看護倫理教育に向けた臨地実習の位置づけに関する研究
## ― 臨地実習における学生の人間欲求構造の分析 ―

丸山マサ美
九州大学医学部保健学科看護学専攻

# A Study on the Position of Nursing Ethics in Clinical Nursing Practice
## — Analysis of Structure of Human Needs of Students in Clinical Nursing Practice —

Masami Maruyama

## Abstract

This paper is to analyze students' reports on nursing ethics.

Frequency of words used by students in Clinical Nursing Practice was analyzed by means of WORD-SEP(frequency of word program).

This is an adaptation of Zipf's law. Zipf interpreted this fact as a factor expressing the fundamental basis of human behavior for "least effort". This program analyzed the structure of the word frequencies in computer programming languages and manuals of computer by the same method as Zipf's. I could approach the study of the structure of human needs of students in Clinical Nursing Practice.

The result of analysis showed that these words such as "kanja", "kango", "enjoy" contained the arguments towards the problems. The view of nursing ethics was to assess the students' understanding of 'patient-centered' of clinical practice of nursing. From these observations, I could approach the study of structure of the position of nursing ethics in clinical nursing practice.

Key Words：clinical nursing practice, nursing ethics education, professionalism, nursing students

## Ⅰ．緒　　言

看護師は、医療の質を確保するために、患者の自己決定を基本とした医療倫理の原則すなわち、患者一人一人の生命と健康の保持・増進に添うこと、又はそれを遵守することが重要となってくる。

臨地実習は、医療倫理の原則を学ぶ中で、看護学生にとって、一人の医療人としての成長を期待される重要な実践の場となる。

本研究は、George Kingsley Zipf（以後、Zipfと略す）の法則に基づく人間行動の基本特性解析を応用するものであり、本稿は臨地実習における看護学生の人間行動の基本特性解析により、看護倫理教育における臨地実習の位置づけを模索するものである。

## Ⅱ．研究方法

### １．調査期間

平成13年３月～平成13年12月；臨地実習開始前（３月）、実習中（７月）、実習終了後（12月）

## 2．対　　象

看護学科３年生10名

## 3．調査方法

学生の考える看護専門職者の自主的・自律的規定について自由記述させ、その結果、漢字語ソートプログラム（以後WORD-SEPと略す）で処理をした。分析方法は、Zipf'sの法則に基づく人間行動の基本原則の特性「least effort」を応用したものであり、臨地実習における看護学生の言語構造を明確にした。

## 4．least effortと本研究の関係

Zipf（1949）は人間行動の基本特性に「least effort追求」があることを考え、言語活動の中にその多くがみられることを予測した。

Zipfは、この方向の研究を1929年から始めている。当時Zipfは、least effortの用語についてより良い表現がないので、これを本の表題[1)]にした。

本研究は、Principle of Least Effort（Zipf）における思想に基づくものであるが、単語区分の方法は、Zipfのものではない。Principle of Least Effortは、すばらしい法則で諸現象にきわめて適合性の高いことが認められている。

この法則の現象を考えに入れて、あるいは文というものを分析しながら、臨地実習における看護学生の人間欲求構造の考え方を展開しようとするものである。

Zipfの発見した法則は、非常に重要なものであり、自然科学の広い領域で確認されている。

看護学生の臨地実習における自由記述の文章を単語に分析し、文の性質を考察することは、Zipfの法則の適用面であり、その適用側面から導き出した課題を考察することになる。

単語分析は、看護学生の自由記述がどういう構造になっているかを確かめるために行う前処理に相当する。

WORD-SEPによる構造分析手法は、慶応義塾大学名誉教授金子秀彬（以後、金子と略す）の開発したプログラムによる方法である。

WORD-SEPは、漢字語の出現頻度構造を分析するもので、本プログラムにより、日本語文章は、「漢字」「ひらがな」「カタカナ」の段階にまで処理することが可能になった。

看護学生の自由記述の分析はZipfの法則の応用である。看護学生の自由記述による文書情報、すなわち看護専門職者としての自主的・自律的規定の文章は、文章の圧縮によって学生の行動欲求が明確になる。

## 5．倫理的配慮

調査対象者である看護学生に関しては、あらかじめ、研究の主旨を説明し、書面にて同意を得た。また、本研究への参加が、実習成績と無関係であること、拒否可能であること、さらには、個人が特定されないことを説明した。尚、本調査結果は、学術集会での報告ならびに、学術誌掲載が予定されるが、研究終了後のデータは、破棄されることを約束した。

**表１．自由記述ソート順結果の一部**

（単語数　1149語／違う単語数　643語）
＊＊＊ソート順リスト
［漢字］

| | | | |
|---|---|---|---|
| 1, | 2, | 2, | 一 |
| 2, | 3, | 5, | 一人 |
| 3, | 1, | 6, | 一人一人 |
| 4, | 1, | 7, | 一貫 |
| 5, | 6, | 13, | 丁寧 |
| 6, | 6, | 19, | 上 |
| 7, | 3, | 22, | 不安 |
| 8, | 3, | 25, | 与 |
| 9, | 2, | 27, | 中 |
| 10, | 1, | 28, | 乱 |
| 150, | 104, | 501, | 患者 |
| 151, | 1, | 502, | 患者一人 |
| 152, | 2, | 504, | 患者一人一人 |
| 153, | 1, | 505, | 患者中心 |
| 154, | 1, | 506, | 患者何 |
| 155, | 1, | 507, | 患者変化 |
| 156, | 1, | 508, | 患者家族 |
| 157, | 1, | 509, | 患者自身 |
| 158, | 2, | 511, | 悩 |
| 159, | 3, | 514, | 悲 |
| 160, | 7, | 521, | 情報 |
| 161, | 1, | 522, | 情報交換 |
| 162, | 3, | 525, | 感情 |
| 163, | 1, | 526, | 感謝 |
| 164, | 7, | 533, | 態度 |
| 165, | 1, | 534, | 慎 |
| 166, | 3, | 537, | 所 |
| 167, | 1, | 538, | 手指 |
| 168, | 5, | 543, | 技術 |
| 169, | 1, | 544, | 把握 |

## Ⅲ．研究結果および考察

看護学生の記述による漢字語ソート順リストは、表１（単語数1149語、違う単語数643語）となり、さらに、記述内容の一括結果は、表２の通りであった。「患者」という言語の頻度が最も高い。また、臨地実習の経過における記述の内容の分析によると、実習開始前（３月）、実習中（７月）、実習終了後（12月）の言語の頻度の変化は、表３であった。

**表２．頻度順リスト記述内容の一括処理結果（上位4位）**

| 頻　度 | 漢　字 |
|---|---|
| 1. | 患　者 |
| 2. | 行 |
| 3. | 看　護 |
| 4. | 自　分 |

**表３．頻度順リスト（Ａ：３月　Ｂ：７月　Ｃ：12月）（上位４位）**

| 頻　度 | 漢　字 | | |
|---|---|---|---|
| | A | B | C |
| 1. | 患　者 | 患　者 | 患　者 |
| 2. | 行 | 行 | 行 |
| 3. | 守 | 援助､看護 | 看　護 |
| 4. | 自　分 | 接 | 自　分 |

表２同様、「患者」という言語の頻度が常に高い。

これまでの看護倫理の実証的研究は、ナースの倫理的行動、判断、推論についての調査結果を解釈するものが多く、筆者も、倫理観形成段階にある看護学生の実態の把握として、過去に調査[2)]した。その結果から、看護学生は、臨地実習において学内での実習には見られなかった「患者の立場」を洞察していることが明らかになった。この研究から、臨地実習は、看護実践のための正しい倫理基盤形成のフィールドと考えられた。

今回、臨地実習開始前、実習中、実習終了後における看護学生の看護専門職の自主的・自律的規定についての自由記述を単語分析し、文の性質を考察するといったZipfの法則を適用した。

そもそも人間は、全く自由に一つ一つの言葉を選んでそれを綴り文を作るのに、文の構造を全体的に調べると、個々のwordの出現頻度は、一つの法則に従っていることをZipfは発見した。先にも述べたが、Zipfは、これを人間基本特性である「least effortを追求する行動原理」の事例とした。

WORD-SEPの利用は、看護学生の看護専門職に対する自主的・自律的規定の基本特性の抽出に可能であると考えられた。

金子によると、一つのwordは、spaceからspace間での文字列で規定される。Spaceとは、一般的には何もない空間としか理解されていないが、極めて重要な文字だと認識した。ここにWORD-SEPプログラムの理解の基本課題[3)]がある。

看護学生の臨地実習開始前、実習中、実習後に記載した自由記述の分析から、看護学生の考える看護を志す専門職者の自主的・自律的規定を示す言語のトップには、常に「患者」があった。看護学生が、「患者」を看護の主体に置いて実習に取り組んでいることが示唆される。

また、カタカナの頻度に関しては、「プライバシー」、「ケア」、「コミュニケーション」といった

**表４．頻度順リスト（Ａ：３月　Ｂ：７月　Ｃ：12月）（上位４位）**

| 頻　度 | カ　タ　カ　ナ | | |
|---|---|---|---|
| | A | B | C |
| 1. | プライバシー | ケ　ア | ケ　ア |
| 2. | カルテ | コミュニケーション | プライバシー |
| 3. | ケ　ア | プライバシー | コミュニケーション |
| 4. | コミュニケーション | カルテ | カルテ |

看護実践に見いだされる道徳的現象、看護実践の道徳的言語や倫理的基礎としての言語（表４）が見られた。

日本語には、スペースがない。スペースがなければ、word設定ができないことになる。そうなると単語分解ができなくなる。そこで、この問題

を解決するために利用されたものが「漢字」「ひらがな」「カタカナ」の区分である。漢字が連続する限り、それは漢字語となり、「ひらがな」が連続する限り「ひらがな」文字綴りとされる。

量的研究の限界[4]は、30万語のユリシース小説について既に証明されている（表５資料）。つまり、今回のデータは、単語数1149語（表１）であり全く問題はなかった。

著者は、これまでに、生殖医療における患者[5]の欲求構造の分析において、本プログラムを応用し分析を試み、方法論の妥当性について検証した。

文を単語に分析し、文の性質を考察することは、Zipfの法則の適用面である。WORD-SEPプログラムを開発した分析手法[3][6][7]は、Zipfの法則を検証する手順に必要な資料を獲得する手段となる。

今回の分析結果から、看護学生の考える看護専門職者の自主的・自律的規定には、「患者」、「行（為）」および、「行（動）」、「行（おこない）」が、上位となった。看護学生は、「見」学の姿勢ではなく「行＝（実践）」学としての姿勢を看護専門職者の自主的・自律的規定に考えているのか。

また、非常に興味深い結果であるが、実習開始前（３月）の姿勢「守」から、実習中（７月）には「援助」、実習終了後には「看護」と言語が推移（表３）している。

対象者が、最高学年の学生であることから、基礎教育を終えた段階（３月）における看護学生の意識は、「守」の姿勢にあり、６ヶ月の臨地実習終了後（12月）には、「看護」への欲求と変化していた。

臨地実習は、医療に取り組む動機づけや看護の心、社会的使命感を学ぶ体験学習である。倫理観形成段階にある看護学生にとって、臨地実習は、専門職者としての自主性・自律的規定を考える上で、貴重な学びの場であることが示唆された。

## Ⅳ．今後の展望

看護倫理学は、講義室や実習室での学生同士の演習によってのみ学ぶ学問領域ではなく、むしろ臨地における看護実践にこそ見いだされ、各人の

**表５．資　料**

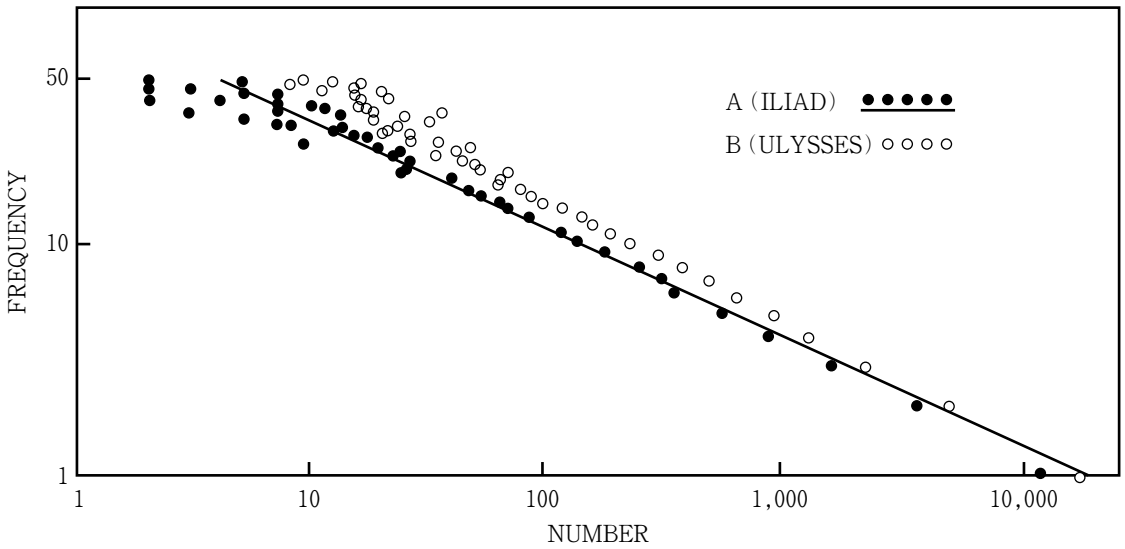


Fig. 2-3. The number-frequency relationship of words. (A) Homer's Iliad,. (B) *James Joyce's Ulysses*.

HUMAN BEHAVIOR AND THE PRINCIPLE OF
LEAST EFFORT, An Introduction to Human Ecology by
GEORGE KINGSLEY ZIPF, Harvard University
(Facsimile of 1949 edition) p.34, Fig-2-3.

倫理的判断を問われる中で培われるものではないだろうか。

看護学生は、臨地実習において、倫理の原則：一次原則である自律（Respect for Autonomy）[8]、善行（nonmaleficence）[9]、恩恵（beneficence）[10]、公正（justice）[11] の概念を実学として体験しつつ倫理的判断決定のための基本を学んでいく。

本研究は、探索的ではあるが、臨地実習における看護学生は、「患者中心」とした実践活動を行っている事実が明らかになった。

今日的医療においては、看護の専門性、社会性が求められる時代にある。その時代を生き抜くためにも、看護学生にとっての臨地実習は、「患者中心の医療」を考える最初の機会となった。

本研究は、看護倫理教育の立場から「患者中心」の道徳的現象、ならびに、看護実践の道徳的言語・倫理的基礎、および看護実践における倫理的判断の哲学的分析・評価ツールとしての開発の一助としても期待される。

今後は、患者中心の看護における看護倫理教育の基本的精神および、臨地実習が抱える現実的な看護倫理教育の実践の座標軸構築を目指している。ますます本研究を深化させていく必要があろう。

## 【付　　記】

本研究は、平成14年７月札幌において開催された日本看護学教育学会第12回学術集会第34群「看護倫理」部会において報告した。

## 【引用文献】

１）George Kingsley Zipf,Human Behavior & The Principle of Least Effort, An Introduction to Human Ecology, Addison-Wesley Press Inc, 1949
２）丸山マサ美,臨地実習における看護倫理教育、生命倫理Vol. ９, No.1, pp.141-145. 1999.
３）金子秀彬、Zipf法則に適合しない英文テキスト、常磐大学人間科学論究第５号, pp.15-28, 1997.
４）前掲書１）p.34
５）丸山マサ美、不妊治療を受けた女性たち手記の分析―医学哲学医学倫理第17号, pp.118-122, 1999.
６）金子秀彬、Zipfの法則とそれを基とする人間欲球構造の分析、常磐大学人間科学部紀要第９巻第２号, pp.87-101. 1992.
７）金子秀彬、日本語文のZipf法則型構造、常磐大学人間科学論究第３号, pp.53-64. 1995.
８）TOM L. BEAUCHAMP, JAMES F. CHILDRESS, PRINCIPLES of BIOMEDICAL ETHICS, Oxford University Press, pp. 120-188, 1994.
９）前掲書８）pp.189-258.
10）前掲書８）pp.259-325.
11）前掲書８）pp.326-394.

## 【参考文献】

１）アンJ.デービィス監修、看護倫理、日本看護協会出版, 2002.
２）サラT.フライ著,看護実践の倫理、日本看護協会出版会, 1998.
３）中西睦子、看護実践を記述する用語の構造の解析および用語体系の構築に関する基礎的研究、平成10年度～11年度科学研究費補助金（基盤研究（B)(2)）研究成果報告書、平成12年３月
４）時井聰、専門職論再考、学文社, 2002.
５）エリオット・フリードソン、進藤雄三・宝月誠訳、医療と専門家支配、恒星社厚生閣, 1992.